# 悲しみ記号

奥山紗英

悲しくなってきた、
と言ってみる
パジャマのまま車を走らせる
車に昨日の雨がついている
悲しみの雨だ、
と思う
シフトレバーがぶるぶる震えている
悲しみレバーだ、
と思う
向かい側から走ってくる車が青だ
悲しみの車だ、
と思う
照葉樹林の木々が少しずつ葉を落としている
悲しみを隠している、
と思う
名前の分からない草で茂みが作られている
お互いに名前を知らなくて悲しい、
と思う　名前の分からない茂みから茶色いボールが飛び出した。ブレーキを慌てて踏んだが間に合わなかった。早朝のあぜ道に車を止めて、ドアを開けて降りた。茶色いたぬきが倒れていて、私はその歯並びを見ていた。たぬきは無理やりに起き上がり、足を引きずって茂みの中へと消えていった。